

シカ対策

バランスを崩した自然

ニホンジカ (*Cervus nippon*) は、かつて南アルプスの標高 2,000~2,500 メートルの高地で草を食べていました (冬には標高の低い場所に下りていました)。しかし、1990 年代後半から、ニホンジカは夏と秋に山々の最上部、標高 2,500 メートル以上に進出するようになりました。こうした高低差 1,100 メートルの移動範囲は、世界中の他のシカの個体群では見られません。

シカたちがより高いところへ進出していく動機は非常に単純です：食べ物を探しているからです。個体数が増加しているため、山の下方にある従来の草地ではもはや十分な食料を得られなくなっているのです。では、このシカの増加の背景には何があるのでしょうか？そこには複数の長期的要因が作用しています。まず、ニホンジカの天敵であるニホンオオカミが、20 世紀初頭に絶滅しました。その後、1980 年代になると生活様式の変化と地方の過疎化により狩猟者の数も減少し始めました。その過疎化により、シカが餌場とする耕作放棄地が増えました。同時に、地球温暖化の結果として降雪量が減少したことで、より多くの子鹿が冬を乗り越えて成体になることが可能になりました。

南アルプスを訪れる人は、シカに食べられたり、雄鹿の角に擦られたりして樹皮が剥げた、シカ害を受けた木々に出会うことがあるでしょう。しかし、シカによる最も深刻な被害を受けているのは、つぼみの花が食べられてしまう高山の草原です。2011 年以降、環境省と地元のボランティア団体が協力し、シカの侵入を防ぎ花を守るために 6 月から 10 月まで草原に柵を設置しました。